



上 と 下

昭和三十三年六月十一日 印刷
昭和三十三年六月十五日 発行

定価 参百貳拾円
地方売価 参百参拾円

著者 井上友一郎
発行者 佐藤亮一
発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一
電話東京(34)代表 七一一(九)
六二〇(五)
振替 東京 八〇八番

乱丁・落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

目次

宝くじ		七
箱根火山		一五
誇り高き人		二七
色と欲		四三
夜も明るく		五七
人生無宿		七〇
青いうねり		八六
心の花火		九五

しのび泣き	二一
星より星へ	二〇
夏は逝きぬ	一九
愛の巢	一八
他人井	一七
門と堀	一六
影の力	一五
さんまの煙	一四

焰とローソク	二四五
寒い青空	二六五
男の涙	二八三
弱い光り	三〇五
双曲線	三二〇
南西の風	三三三
梅一輪	三五三
若い力	三六三
蘇える青春	三七三

装
幀

森
田

元
子

上

と

下

宝くじ

帳場のブザーが、唸るように大きく響いた。

「おい！ お呼びだよ……」

女中の典子は、主人の声にハッとして、すぐ流し場から、両手を拭き拭き帳場の板の間へあがってきだが、壁に取り付けた豆ランプは、「千鳥の間」と書いたところに灯が入っている。

「奥の千鳥だ。ほら、あのアベックだろう。そろそろ、お腹でも空いたンじゃあねえのかい」

何しろ閑散な昼下りのひとときである。主人は、紺のジャンパーの胸に、近頃、新宿の犬屋で買ったばかりの、生後二カ月のスピッツを抱き寄せて、しきりと舌をなめさしたり、頬すりしたり、いわゆる猫可愛がりの態たらくである。

典子は、白い木綿の割烹着を、さっさと取って、裾短かな黒サージのスカートから、白い素足をぬつと出したま

ま、狭い廊下を小走りに奥へ急いだ。

満で算えて、まだ十九歳の典子の胸では、ふくれるだけふくれあがった大きな乳房が、黄色い半袖のスウェーターの下で、モコモコと揺れ動いている。彼女は、貧しさのせいもあるが、未だかつて自分の乳房をびったり支えるブラジャアなどというものは使ったこともないのだった。

「ごめん下さい」

と、典子はブザーを鳴らした。

「千鳥の間」までやって来ると、この種の旅館の作法通り、充分過ぎるくらい、お客の注意を促してから、そつと唐紙に手をかけて言うのだった。

「あの、お呼びでございましょうか……」

すると、待ちかまえていたように、部屋の中から、女の声がすぐに応じた。

「どうぞ」

「ごめん下さい」

と、もう一度くりかえしてから、典子は静かに唐紙を引き開けた。しかし、敷居際に踞んだぎり、やたらに室内をじろじろと見回さないのは、かねて主人に仕込まれた通りである。

「ああ、お姐ちゃん、ちよいとお願いなだけとさ、——」
こう喋りかけたのは、白っぽい寝巻一枚で夜具の傍に寝そべっていた男のほうで、

「実は、これから箱根まで行きたいんだけど、小田急の特急券を買つてももらえない？」

「はい。かしこまりました。それで、何時の特急になさいますか……」

「さあ。これから風呂に入つて、御飯も食べなきゃあならないから、二時の奴は少し無理かな、いいから、三時の分を買つておくれよ。もちろん二枚ね」

「はい。わかりました」

「それじゃあ、お金……」

客は、バサバサに寝乱れた頭髮を掻き立てながら、床ノ間に片手をのぼして、折カバンの中から千円札を抜き出した。

その時、傍に寄り添っていた女の客が、これもやはり白地の寝巻の背を円くして、枕もとのハンドバッグを引き寄せると、小さな宝くじの札を掴み出して、言った。

「姐やちゃん。あんた、特急券を買いにいふ時、ついでに、この札、当てるかどうか、そのへんの宝くじ屋さんで訊いてちょうだい……」

典子は、そのお客から預つた千円札と宝くじを、後生大事に汗ばんだ掌に握りしめて、洋服に下駄穿きのまま、新宿の盛り場へと出ていった。

もっとも、盛り場へ出るとは言つても、彼女の働いてい

る旅館「伊香保」そのものが、新宿の歌舞伎町からはんの少し奥へ入った或る大きな病院の横町だから、ざつと半町も歩かぬうちに、映画館や喫茶店の建ち並んだ賑かな雑沓である。

ちょうど週末に近い晩春の一日とて、このへん一帯、とりわけ祭礼か何かのように、凄まじい男女の人波が渦巻いていた。

しかし、典子は、ろくに映画館の看板にも魅入られず、とツとツと地面を蹴るようにして、男みたくない足どりで国電の駅へと急いだ。そして、何より大切な箱根湯本ゆきの特急券二枚を手に入れると、釣り銭の七百四十円を四ツ折りにして握りしめ、今度は米た道とは少し違うが、ガード沿いの道路を、すぐ西口への地下道に飛び込んだ。

昼でも暗い、この地下道の中は、むっとしていた。

時折、頭上のコンクリートから、ほとりと水のしたたりが垂れ落ちるが、そんな湿った地べたの片隅には、申しわけのような藁をしいて、小さな三ツ四ツの子供を連れた女の乞食が、べこべこと往き交う人々にお辞儀しながら、お恵みを乞うているのだった。

「可哀そうに……」

と、典子はその片脇を通りながら、ひそかに自身の幸福を思わないではいられない。

じつさい、彼女の身に沁みて感じるように、この世の中

は、上を見ればキリはないが、まだまだ典子以下の境涯に落ち込んでいる人間は山ほどいるのだ。少くとも、この女乞食などから見れば、とにかく典子は人並みの洋服を着て、夜も、ちゃんと雨の漏らない屋根の下で、布団をかぶって寝ているのだった。

而も、典子には希望がある。

彼女の、いまの望みを言うなら、こうして旅館の女中奉公をしながら、せつせと貯められるだけのお金を貯めて、現在、新宿の西口広場で、朝から晩まで宝くじを売っている父親の六之助と、何とか一しよに暮せる日を迎えたいことであつた。

六之助は、もう五十二三であるが、戦時中に勤めていた滝野川の旋盤工場で、爆弾の破片で片足を失つて、相次ぐ戦後の貧苦のうちに、つれあいにも死なれてしまい、いまでは全く娘の典子だけが唯一の肉親になつてしまつた。

しかし、六之助は郷里の大阪にも戻る氣がせず、また戻つても、どうなるわけのものでもないので、近頃、代々木山谷のトタン張りのバラックから、連日、せつせと新宿の西口広場へあらわれて、ようやく宝くじを売ることで、月に五千円ばかりの収入をあげられるようになった。

典子が偶然にもお客から頼まれた宝くじの札を持って、これから立ち寄ろうとしているのは、もとよりその父親の売り場である。ここもと、彼女は忙しさのせいもあつて、

もう二十日以上も六之助に会っていない。

典子の足は、軽く弾んだ。

新宿の西口広場は、ここを起点に、各方面への大型バスが発着するので、只さえ国電や私鉄の乗降客でこつた返す上に、いつも大勢の男女の群れが、うろうろしている。

小松六之助は、車道越しに広場を背にして、ちょうど駅の入口に向い合つて宝くじの店をひろげ、小さなミカン箱に腰かけながら、ぼかんと眼前の人波を眺めているが、その顔付きは、汚い烏打帽の下で殆ど無念無想と言つてもよい。

ざつと二百枚近くの宝くじの札を並べた小さな台には、六之助の片時も手離せぬ汚れた松葉杖が一本、そつと立てかけてあるけれども、これは終戦直前の空襲で左の脚を膝頭からもぎ取られたので、いまは全く血の通つた自分の身体の一部であつた。

六之助は、この松葉杖を突いて、毎日、十時頃から代々木山谷のバラックから、びよんびよんと新宿の西口まで歩いて出てくる。そして、どしや降りの雨でも降らぬ限り、まる一日じゅう、陽に照らされて、埃をかぶり、かれこれ夜の八時前後まで、石の地蔵さんみたいに、道端にうずくまつているのだった。

「おやじ！」

突然、宝くじを並べた台の横手に、紺ジャンパーの胸をひろげた、威勢のいい若者が近付いてきた。

「へい？」

と、思わず視線をあげたが、六之助は一ト目ながめて、こいつは確かに、このへんの地回りだなと見て取った。

若者は、台の正面にぶらさげてある「二百万円の幸運！」と書いた紙きれを、じろりと見据えて、

「どうだい、おやじ！ 景気はいいか」

と言った。

「へい。まあ、ぼつぼつですよ……」

「そうか。しかし、ここはショバ（場所）がいいから、相
当に売れるだろう？」

「へい。まあ、お陰さまで……」

「けんど、このへんは人氣が悪いや。氣を付けなきゃあ、
いい加減な野郎が、うろちょろしやあがつて、おめえたち

にも迷惑をかけるかも知れねえぞ。しかし、そんな時は、

サツ（警察）へ走るより、おいらに一ト言、知らしに来い
ナ」

「へえ……」

「おいらあ、いつだって、この先きのパチンコ屋にいる。
用があつたら、やつて来いよナ」

「お願い申します……」

「ところで、おやじ」

と、その男は、ひょいと台の上に片手をのばして、一枚の宝くじをゆっくりと抜き取りながら、

「これ一枚、いくらだい」

「へい。みんな百円ですが……」

「そうか。一枚もらっとく。いいナ？」

言うより早く、その紙片をくるりと指先きに巻き付けると、もはや男はジャンパーの背を見せて、さっさと通行人を掻き分けながら去っていくのだ。

六之助は茫然として、そのうしろ姿をながめていると、ふいに横手で若い女の声が起った。

「お父さん。あれ、何よ？ ひどいじゃあないの！」

「いいさ、いいさ！」

と、六之助は久々に見る娘の典子を、むしろ慰めるような口調である。

「どうせ新宿で商売すれば、こんなことは年じゅうあるんだよ。言ってみりゃ、税金だから……」

「それだって、お父さん、ずいぶんひどいわ。どこのヨタモンだか知らないけどさ。あんなふうには、ちょこちょこやつて来て、一銭も払わずに、シヤアシヤと宝くじを只で持っていくなんて！」

典子は、いかにも口惜しげに、いま、その地回りの若者が歩き去った歩道の人波を睨んでいるが、その憤慨は、直

ちに父親の六之助へのいたわりに通じているのだ。

背後を通るタクシーのせいであろうか、「二百万円の幸運！」と書いたピラが、風もないのに、台の前でヒラヒラとまくれあがる。

典子は、白く埃のたまった六之助の烏打帽を痛ましげに見下ろした。

「でも、お父さん。あれが結局、街の暴力というもんでしよう。一応、警察へ届けといたら？」

「まあ、いいんだよ。そんなことしたら、父さんは明日から、ここで商売なんか出来やしなくなるからね……」

「そうか知ら？」

「それより、典子ちゃん、——」

と、六之助は眩しげに、烏打帽のひさしの下から娘を見上げて、

「お前、何かい。このへんにお使いでもあつて、やって来たの？」

「ええ。ちよいとお客さまに頼まれて、箱根ゆきの特急券を買いに来たのよ。そして、ついでに、そのお客が自分で買った宝くじが当たてるかどうか調べて来てくれと言うもんだから、あたし、急にお父さんの顔が見たくなっちゃったんだわ」

典子は、小田急の特急券と一しよに握りしめていた宝くじの札を、そっと台の上に置いた。

六之助は、その札を指で压えて、用意の当選番号表を膝の上にひろげながら、

「えーと、この前、発表の3組の185446かい。……」

アハハ。こりゃ、お気の毒だが、十等だねえ」

「十等と言うと？」

「つまり、いちばんダメの当りだよ。しかし、この札と引換えに、五十円だけ戻るわけさ。——五十円、持っていくかい」

「持っていくわ」

「じゃあ、そうしなさい。しかし、この五十円は、ちゃんとお客さんに返すんだよ。人間なして、みんなオーヨウなこと言ってるけど、案外にこまかいんだ。気をみられるよ」

「でも、そのお客さんは、百円以下なら、あたしに割り戻し金をあげると言ったわ。お駄賃のつもりでしょう」

「それでも、いっぺん、返してみるのさ。その上、あげるとおっしゃったら、頂戴しなさい」

「それとも、これはお父さんのタバコ代に寄付しようかな……？」

「そんなことはいけないよ。とにかく、一応持って帰って返すもんだ」

六之助は、用意の小銭で五十円を掴み出すと、一枚一枚、それを静かに台の上に並べた。

典子が西口広場から戻ってくるに先立って、例の「千鳥の間」の同伴客は、風呂に入った。

狭いタイル張りの浴室には、ホンノリと湯気が立ちこめているけれども、ガラス越しに射し込んでくる五月の明るい外光が眼にまぶしく、いかにも二人は自分たちの情痴のあとの白々しさを、むき出しに見る思いである。

しかし、男は湯舟のなかで不精たらしく齒ブラシを使いながら、ちょうど外の蛇口の前にうずくまって身体を洗う女の、透き通るような肉体を、ほんとと眺めているのだった。

「三時の特急に乗っちゃうと、箱根へ着くのは、何時頃？」と、彼女は別に照れもせず、自分のむちりした肉付きのいい裸身が、充分相手の玩賞に堪えているのを勘定に入れた上で、浴槽のなかへ声をかける。

シャボンの泡が、ビュッと二つばかり、薄桃色のタイルの上に飛んだ。

「さあね、——とにかく、新宿から湯本まで、九十分で行っちゃうんだから」

「九十分？ 九十分と言うと、一時間と三十分ね」

「そういうわけだよ」

「すると、四時半には、湯本へ着くわねえ？」

「そういう勘定だ」

「それじゃあ、湯本から車に乗っても、とにかく明るいうちにホテルに落ち着く事が出来るわ……」

「ねえ、君、そりやそうと、脱衣場のベルを押して、ちょっと女中に剃刀を持って来さしてくれないか」

男は齒ブラシを放り出して、やはり、このまま湯のなかで、安全剃刀を使いたいと思った。

「あら。剃刀、なかったか知ら……」

彼女はシャボンの泡だらけの身体を起して、少し前跣みに脱衣場へ立っていく。

そして、柱のボタンを軽く押すと、この浴室は案外帳場に近いらしく、すぐさま、ブーッと鈍いブザーの音が廊下越しに聞えてきた。

「あの女中さん、もう特急券を買って来てくれたかな？」

と、彼女はもとの蛇口の前に戻って、せっせと太股などを、こすり始めた。

「さあ。もう帰って来ただろう。それより、あの宝くじ、何等かに当たっていたら面白いなあ」

「一等は、いくら？」

「二百万円さ」

「へえ？ 素敵ねえ。もし、二百万円当たっていたら、このお金、誰のものになるのか知ら？」

「そりや、もちろん、ほかのものさ。だって、券を持っていたのは君だけれど、そもそも、この間、街で買った時、大

枚百円出したのは、ほくだからね」

「うふふ。……取らぬ狸の皮算用とは、このことよ。それで、一等から何等くらいまで、あるンです？」

「さあ、十等まであるらしいけど、十等は五十円さ。しかし、それもいいほうで、十等以下は完全な空くじということになる……」

浴室のガラス戸がごとんと鳴って、女中の典子の黄色いスウェターの姿が写った。

「お呼びでございましょうか……」

典子が、すりガラスのむこう側で声をかけると、やっと湯舟からあがった男が、彼女に安全剃刀を持って来るように命じた。

「急いでず、あんまり時間もないからねえ……」

「はい。かしこまりました」

「ああ、それから、ちょっと、ちょっと！」

と、廊下へ出かかる典子の影を、ガラス越しに呼び留めて、

「あの特急券は、手に入った？」

「はい。ちゃんと二枚、買って参りました。お釣り銭と一しよに、あとで部屋へお持ちいたしますから……」

こう答えて、いったんガラス戸から薄れかかった典子の黄色い半袖のスウェーターが、ふいに前より、グッと濃くな

って接近した。彼女は言った。

「あの、それから、宝くじの札でございすけど、くじ屋さんに調べてもらいましたら、十等の割り戻しが五十円でございました」

「へえ、やっぱりね！」

と、軽い苦笑と共に口を挿^{はさ}んだのは、蛇口の前で立て膝していた女である。

「それじゃあ、女中さん。その五十円は、差上げますから、取っというて……」

「いいえ。結構でございます。あとで、切符と一しよに、お持ちいたします」

「いいのよ。たった五十円だけど、取っというてちょうだい」

「はい。でも、とにかく……」

と、言葉を濁して、典子はそのまま狭い脱衣場を出ていった。

あとに残った二人は、それからせつせとヒゲを剃^そり、上り湯をジャアジャアと汲んだりして、見るからにセカセカと動きだしたが、この種の同僚客の常として、のつびきならない土壇場まで散々のうのと遊びほうけておきながら、さあ時間だとなれば、日頃、お互の仕事の上で示せばいいほどの真剣さで、あわてふためいて引きあげの支度にかかる習性がある。

それでも、彼等は浴室を出る直前、ふと何となくお互の身体のふれ合うような一瞬間、裸で突つ立ったまま、チュツと音させて、さりげないキスを交わした。

「さあ、しかし大変だぞ。少し頑張つて、突貫化粧にかかつてくれよ……」

「そうね。御飯も、あんまりゆつくりとは頂けないわ」

こうして、二人はアタフタと前後して風呂場を飛び出し、奥の「千鳥の間」へ引きあげたが、すでに典子の手によつて、簡単な朝食の膳が用意されているのだった。朝食と言つたところで、型通りのミソ汁と焼き海苔に、卵の目玉焼きが大きな皿に乗せてあるのが関の山だ。

典子は、わざと給仕の役を同伴の女に任せて、さつさと引き退つてきたけれども、例の大切な特急券と釣り銭の七百四十円に、宝くじの割り戻し金五十円を添えて、ちやぶ台の端つこに置くことを忘れなかった。

この同伴客が急ぎに急いで玄関を飛び出していったのは、それから三四十分の後である。

ところが、その直後のこと、珍しくも典子に電話が、かかつてきた。

典子は、ふしぎでたまらなかつた。

「どうも、すみません。でも、あたしに電話なんて……」
こう言いながら、帳場の片隅へ入り込んだ彼女は、先ず

受話器を取るよりも、主人のほうに向き直り、べこべことお辞儀ばかりするのだった。

主人は可愛いスビツツをあやしていたが、

「早く話しなよ。お父つつあんからだ」

と言つた

「へえ？ どうして、電話なんか、かけてくるンでございましょう。ほんとに相すみません」

「早く、出なよ」

「すみません」

と、典子はやつと耳朶みみたがの赤くなる思いをこらえて、受話器を握つた。

「もし、もし。あたし、典子ですけど……」

すると、待ちかまえていた六之助の声が流れてくる。

「もし、もし。わしだよ。判るかね？ ちょっと急いで、電話しなくちゃあ、と考えてナ……」

「どうしたンです？ いま、どちらなの？」

典子は、父が何となくあわて込んでいるらしいのを、その語勢から汲み取つた。

六之助があとをつづけた。

「いま、新宿の公衆から、かけとるンだが、——実はナ、

お前が、さつき持ってきた宝くじのことなンだよ。あの宝くじ、十等で五十円の割り戻しを渡したけれども、わし、あの時、うっかりと読みそこなつてナ、あとでゆつくり調